

小山 清著

『国語科教育理論と実践 十三』

教壇に立つ者として何よりも「授業力の錬成」の必要を説き、国語科授業実践に多くの示唆を与え続けてきたこのシリーズも、本著で十三作目となった。文章に置ける変化・対立の構造に着目し、「構造的」な発問と板書の展開に主軸を置く指導論によって支えられた著者の論考は巻を重ねるに連れてより一層の明晰さを加え、既巻収録のものに劣らず、日々の授業に挑む我々にとつて大いに資する、優れた内容のものばかりになっている。

更に本書では、そうして読みの指導のみならず、話し方・聞き方の指導めざした單元「お話の楽しさと工夫」の実際や、近年注目されているディベートの指導に対しての講話など音声言語に着目したものと合わせて収められており、その実践の幅広さを感じさせると同時に、眼前の生徒にどのような力をこそつけさせるべきかと常に模索するその姿に襟を正される思いがする。「人間の生き方にまで及ぶ国語科の授業において、（授業力が）8の先生に教えてもらうか、5の先生に教えてもらうかは、生徒にとつて一生を左右しかねない一大事である」という著者の言葉を、本書を手にする者は皆、今一度自分に投げかけて見るべきであろう。

(A5判 二〇三ページ 一九九四年九月五日 私家版)

頒価一〇〇〇円)

(藤田 修司)